



「見たり、聞いたり、探ったり」No.264

通算 No.415

青木行雄

「石原慎太郎」氏の軌跡 (2022年(令和4)2月1日逝去)

異色の「政治家」と「作家」の間を思うがままに行き来しながら、自分の存在感を演出して来た「石原慎太郎」氏が、2022年(令和4)2月1日に大田区の自宅で、89歳の生涯を閉じた。

1999年(平成11)から4期13年半の東京都知事在任中は斬新なアイデアを具現化しながら、強いリーダーシップを築いた人物であったと思われる。失言や、失策もあったようだが、存在感がすごくある人で、思ったことを率直にズバリと語る人だった。

一橋大学在学中の1956年(昭和31)、デビュー作の「太陽の季節」で芥川賞を受賞、1968年(昭和43)に参議院全国区で当選し、1972年(昭和47)には衆議院にくら替えして当選した。1975年(昭和50)に都知事選に立ったが、現職・美濃部亮吉氏に敗れたが、翌年の総選挙で衆議院に再び返り咲いた。



2014年(平成26)記者会見時の慎太郎氏81歳

国会議員在職25年を機に1995年(平成7)に衆議院議員を辞職し再び執筆活動に専念するようになったが、1999年(平成11)には2度目の都知事選に挑んだ。直前まで出馬を迷ったが、自らの暗殺

計画を知りながら米国から帰国して命を落としたフィリピンのベニグノ・アキノ元上院議員と自身を重ね、「運命に向かって歩いて行った彼の生きざま、死にざまに感動した」と間際に出馬を決断したという、さすがに作家らしい決断だが、見事都知事に大差で当選したのである。

都知事就任後は、排ガスの黒いススが入ったペットボトルを振りかざして「皆さんの健康がかなり危ないところに来ている」と都民の危機意識を喚起、業界団体などの反対を押し切って1都3県でのディーゼル車規制導入を実現した。

スポーツ振興にも尽力し、2期目の2007年(平成19)に始めた東京マラソンは、国際的な市民マラソンとして定着した。2016年(平成28)の夏季五輪招致には失敗したが、その挑戦は2020東京五輪・パラリンピックの招致成功の礎となったといわれている。

一方で、強引な手法が反発を招いた要因もある。都が大手金融機関を対象に2000年度(平成12)から導入した外形標準課税(銀行税)は、公的資金を受ける銀行への不満を巧みにつかんで都民の支持を取りつ

けたものの、金融機関から「狙い撃ちだ」と猛反発を受け訴訟にまで発展した。結局、最高裁で都が税率を引き下げることによって和解が成立した。

貸し渋りに苦しむ中小企業の支援をうたい、都が2005年(平成17)に1000億円を出資して設立した「新銀行東京」も行き詰まった。甘い融資審査で焦げ付きが相次ぎ、出資額の大半は損失の穴埋めに消えたという。

尖閣諸島(沖縄県)を購入する構想発表時「日本人が日本の国土を守るために島を取得するのに文句があるか」といった過激でわかりやすいスローガンは世論を味方につける一方、「三国人」発言などの差別的な発言が批判も浴びた。

2014年(平成26)の政界引退後も、石原都政下で推し進められた施策の過程は、たびたび議論を呼んだ。小池百合子知事就任後の2017年(平成29)には、豊洲市場の土壌汚染問題を巡り、築地からの移転決定時の最高責任者として都議会百条委員会で証人喚問に臨んだときは足取りはおぼつかなく、「記憶にない」などと繰り返し言葉をのべていた。

石原慎太郎の生い立ちについて

父石原潔(山下汽船社員、愛媛県出身)、母光子、(広島県宮島の出身)両親により兵庫県神戸市にて、1932年(昭和7)9月30日誕生。北海道小樽市および神奈川県逗子市で育つ、神奈川県立湘南高等学校から、一橋大学法学部を卒業する。一橋大学では社会心理学の南博ゼミに所属。

湘南高校ではサッカー部に。一橋大学では柔道部、サッカーと体育系の一面を持つ、サッカーに関しては高校・大学ともにレギュラーで試合に出場していたようだ。文芸評論家の江藤淳氏とは同級生であり、共に高校の先輩である歴史学者「江口朴郎」氏にはお世話になっていたという。

公認会計士になるために一橋大学に入学したものの、会計士には向かないことを自覚した慎太郎は、休刊していた一橋大学の同人誌『一橋文芸』の復刊に尽力する。



「新銀行東京」設立時の式典風景



2017年(平成29)84才、豊洲問題の会見時



小学校時に母と慎太郎の写真

そして、慎太郎はこの同人誌に処女作である「灰色の教室」を発表し、文芸評論家の浅見淵に激賞されて自信をつけたのをきっかけに、第2作目の「太陽の季節」を執筆することになる。

こうして、一橋大学在学中に「太陽の季節」で第1回(1995年度)文学界新人賞、第34回(1995年下半年)芥川賞を受賞することになった。

昭和生まれとしては初の芥川賞であったという。作品にみなぎる若々しい情熱や生々しい風俗描写、反倫理的な内容が賛否両論を巻き起こした。ベストセラーとなる。

こうして作家としての地位を重ねて行った。

石原慎太郎氏に対して

出来事やニュース、評判や伝記等前後するが、目新しい記事になったものを一部記して見た。

一橋大学在学中に執筆した「太陽の季節」により「太陽族」が流行語となり、長身でヨット好きの石原氏の「慎太郎刈り」をまねる若者が続出した。石原氏23歳。

「僕は芥川賞をとって有名になったんじゃない。俺のおかげで芥川賞は有名になった」と自負されたと言うが、事実だったようである。

芥川賞創設時からの選考委員であった佐藤春夫から「美的節度の欠如」と嫌悪され、弟、裕次郎のデビュー映画「太陽の季節」も不良映画としてPTAにいらまれた。

慎太郎と裕次郎、この兄弟の青春は、消費が拡大する戦後の成長期と重なり、慎太郎は「非常に幸福だった」と振り返っていたという。弟はスター街道を走り、兄は参議員全国区でトップ当選、名付親となった自民党タカ派「青嵐会」の結成。「東京から日本を変える」と都知事への転身……その率直過ぎる言動が批判されたり、応援されたりの記事になった。



弟裕次郎と若い頃、右慎太郎、左裕次郎

「太陽の季節」は高校生の裕次郎から聞いた若者の風俗を「羨望を持ちながら、客観的に眺め」て描いたもので、高校生時代に父親を失い、家長となった慎太郎には真面目でどこかに孤高の影があった。原点は10代での敗戦、占領体験など、米兵への反抗的態度をとがめられた。軍国教育だった旧制中学が戦後、進学教育に転じたことへの軽侮けいぶの念。今でいう不登校もあった。高校を1年間休学し、絵や詩に没頭した時期もあったと書かれている。

「『NO』と言える日本」で真の独立国家としての再起を訴えたのは、「孤独な感性だけが作家自身を救い、世界をも変える」との信念からだったようである。

死ぬ瞬間まで好奇心を持ち続けたいと語り、「まだ生きていたのか」と言われるより、「あいつ早く死なないかな」と憎まれ口をたたかれ続ける存在でありたいと語り、そのままの人生を生き切ったといえる人生だった。

石原慎太郎の歩み

1932年（昭和7）9月30日	兵庫県神戸市にて生まれる。
1934年（昭和9）12月28日	弟・裕次郎が生まれる。
1936年（昭和11）6月	父の転勤で4才の時北海道小樽市へ転居 マリア幼稚園に入園
1939年（昭和14）4月	小樽市稲穂小学校に入学
1943年（昭和18）2月	父の転勤で11才の時神奈川県逗子市に転居
1945年（昭和20）4月	神奈川県立湘南中学へ進学（現：神奈川県立湘南高校）
1946年（昭和21）	東京裁判を2度傍聴する
1948年（昭和23）	立身出世主義的な校風に反撥し、胃腸病を口実に1年間休学。休学中は文学・美術・音楽・映画に没頭、フランス語も学習
1951年（昭和26）10月	父が脳溢血で急死
1952年（昭和27）4月	一橋大学法学部に入学。柔道部、サッカー部に入部
1954年（昭和29）	学内同人誌「一橋文芸」の復刊に尽力する
12月	処女作「灰色の教室」発表
1955年（昭和30）12月	当時18歳だった石田由美子と結婚。「太陽の季節」発表



「太陽の季節」撮影記者会見、左・慎太郎、右裕次郎

1956年（昭和31）1月	芥川賞受賞
3月	一橋大学法学部卒業。弟・裕次郎が日活俳優としてデビューする
1957年（昭和32）4月19日	長男・伸晃が誕生
1958年（昭和33）	東宝映画「若い獣」の監督を務める。若手文化人、大江健三郎他数名と「若い日本の会」を結成し、60年安保に反対する

1960年(昭和35)	隊長として、南米横断1万キロ・ラリーにラビットで参加
1962年(昭和37)1月15日	次男・良純が誕生
1964年(昭和39)6月19日	三男・宏高が誕生
1966年(昭和41)8月22日	四男・延啓が誕生
1967年(昭和42)	読売新聞社の依頼で、ベトナム戦争を取材する
1968年(昭和43)7月	参議院議員選挙で初当選
1969年(昭和44)11月	「スパルタ教育」を光文社より出版
1972年(昭和47)11月25日	参議院議員を辞職
12月10日	衆議院選挙に東京2区から無所属で出馬して初当選
1973年(昭和48)7月	「青嵐会」を結成
1975年(昭和50)3月18日	衆議院議員を辞職
4月13日	東京都知事選に出馬して233万票を得票するも落選する
1976年(昭和51)12月5日	衆議院選挙で国政に復帰。福田内閣で環境庁長官に
1981年(昭和56)	弟・裕次郎が倒れた際に小笠原諸島から海上自衛隊飛行艇を呼び寄せて帰京し、公私混同として問題になる
1987年(昭和62)7月17日	弟・裕次郎が肝細胞癌で死去(52歳)
11月6日	竹下内閣で運輸大臣に就任
1989年(平成元)8月8日	自民党総裁選挙に出馬、海部俊樹に敗れる。『「NO」と言える日本』を盛田昭夫と共著で出版



1989年(平成元)自民党総裁選出馬会見

1995年(平成7)4月14日	議員辞職
1996年(平成8)7月	弟・裕次郎をテーマに『弟』を発表、数ヶ月でミリオンセラーとなる
1999年(平成11)4月11日	1999年東京都知事選挙に出馬。立候補表明の記者会見での第一声が「石原裕次郎の兄でございます」という挨拶が話題を呼ぶ。鳩山邦夫、舛添要一、明石康、柿沢弘治ら有力候補が出馬の中、166万票を得票して当選

2003年(平成15)4月13日	再度、都知事選挙に出馬。308万票(得票率史上最高)を獲得して再選する
2004年(平成16)11月17日～21日	『弟』テレビドラマ化
2007年(平成19)4月8日	再々度都知事選挙に出馬、投票の過半数に当たる281万票を獲得して再々々当選
2010年(平成22)4月10日	たちあがれ日本の応援団長に就任する
2011年(平成23)4月10日	4選目の都知事選に出馬又々261万票で当選する
2012年(平成24)10月25日	都知事を途中辞任し、新党を結成すると表明
11月13日	「太陽の党」を結党
11月17日	日本維新の会に合流し代表に
12月16日	第46回衆議院選挙に当選、17年ぶりに国政に復帰する



2012年(平成24)新党結成表明時の慎太郎(左)

2014年(平成26)12月14日	第47回衆議院選挙に落選
12月16日	政界引退を表明
2015年(平成27)4月29日	春の叙勲で「旭日大綬章」受章
2017年(平成29)3月20日	豊洲市場移転問題に関して都議会百条委員会にて証人喚問を受ける
2022年(令和4)2月1日	自宅にて死去、(89歳)戒名は「海陽院文政慎榮居士」

※ 映画スターの兄であり、最年少の芥川賞作家であり、最多得票で当選した参院議員であり、これほど華やかな経歴の持ち主も多くはない。高度成長から経済大国へ、日本という国が、国際社会で自信をつけていく戦後の昭和・平成という時代を気ままに体現したまれに見る人であった。

ふり帰って見ると1999年(平成11)都知事選への出馬会見の時、すでに6人の有力候補が名乗りをあげていた。文面にも記したが、何を言うのか、身構える報道陣を前にして開口一番「裕次郎の兄でございます」と言って出馬会見。

若き青春のころ、弟がどんどん名がうれて羽ばたいていく、複雑な思いが、ミリオンセラーになっ

た「弟」で明かされている。

政治家として数々の問題発言もあった。

「三国人、外国人が凶悪な犯罪を繰り返している」

「文明がもたらしたもっとも悪しき有害なものは、ババアなんだそうだ」

「(東日本大震災は) やっぱり天罰だと思う」等々

それでも人気は衰えず、政界で存在感を示し続けた。

2014年(平成26)に出版した「私の海」(幻冬舎)には、「葬式不要、戒名不要、我が骨は必ず海に散らせ」と遺言状に記したとある。が、2022年(令和4)2月5日、大田区の自宅で家族葬が行われ、戒名は前記。

先祖代々が眠る逗子市の「海宝院」に納骨されたようである。

最後に子供4兄弟、父への思いを自宅前で報道陣に語った話を記してみた。

2022年(令和4)2月1日 大田区の自宅前にて

長男 石原^{のぶてる}伸晃 64才

次男 石原^{よしずみ}良純 60才

三男 石原^{ひろたか}広高 57才

四男 石原^{のぶひろ}延啓 55才

長男、伸晃氏は自民党の元幹事長であったが、父が^{すいぞう}膵臓がんを患っていたと明かし、「昨年末に短編小説を取りまとめ(これが俺の遺作)」として話したという、「政治家経験も長い、最後まで作家として仕事をやり遂げた」と言っていた。

次男の^{よしずみ}良純氏は「一つの時代を築いた父だった。」としみじみ語ったという。

三男、^{ひろたか}広高氏は、現衆議院議員である。

自分にとって「目指す、政治家の先輩だった」と話したという。

四男^{のぶひろ}延啓氏は画家

「父は亡くなる1時間ほど前、呼吸が苦しそうだったが、最後は安らかに息を引き取った」と話した。

青年期から弟・裕次郎と共にスポットライトが当たり続け、最後まで自分の存在感を演出し続けた異色の人物だった。

2022年2月20日 記

参考資料：朝日新聞 ウィキペディア NHKテレビ TBSテレビ 読売新聞